

差別のない明るい町を

罪を償っている人と

その家族の人権



その1

市人権推進課（教育庁舎1階）

TEL 32・2122
FAX 33・3525



今号と次号は、第32回全国中学生人権作文コンテストで、「内閣総理大臣賞」を受賞した森永翔太さん（岡山県・中学三年生）の作文『一滴の涙〜ある夏の出来事〜』を紹介しします。

家族旅行中の出来事。一軒の家が目に見えび込んできた。その家は窓が割れ、建物にはボロボロ。そして一番の衝撃は、「人殺し、出て行け、化け物」などの卑劣な言葉。扉に沢山のビラ。その時下を向いたおばあさんと若い女性が周りを見渡しビラを

外し、逃げるように家に入ってしまった。何この家。何で？」と聞いた。「息子が人殺しをした。当たり前だ。家族も同様な罪を受けるべき。」と運転手が答えた。疑問に思ったが、そのまま旅館に行った。温泉に入り僕は、こんな幸せな時はあのおばあさんたちにはないだろうなと、ふとそんなことを思い、あの二人の悲しい顔が脳裏をかすめた。

皆で話し合うのだ。すぐに返答できなかった。すると祖父が「お前はもう一四歳。善悪は分かるはず。旅行に來てまで暗い話だがこれは勉学よりも大切なこと。よく考えて答えてみる。」と言った。僕は五分十分考えた。答えた。「犯罪者の人の家族があんな思いをするのは可哀想だと思う。犯罪者本人だけではなく、家族まであの卑劣なビラはひどい。窓も割るなんて」そう言い下を向いた。「そうだな。翔太の言う通りかもしれない。世の中はこういうものだ。十人いたら十人の考えがあるが、卑劣だな。」と祖父は言った。「親のしつけが悪いとか、兄弟姉妹が支えていないなどと運転手さんが言ったけど、僕は間違っていると思う。」と何が間違っていると思う？」と聞かれた。答えようとした時、食事の時間になった。そして祖父が「まだ何日か滞在する。よく考えなさい。」と言った。夕食を食べながら

でも僕は心からノリノリになれなかった。あの白髪頭の痩せこけた青白いおばあさんの顔が頭の中から消えなかったからだ。「ああ僕はこんな幸せな時間をあじわっているのか。」

倒れた！僕は「車止めて！」と叫んだ。そして祖父と一緒におばあさんまで走った。「大丈夫？」と言うと、おばあさんが細い声で答えた。「大丈夫です。」

次号に続く

参考・引用文献

「アイユ」
2013年1月15日号

第3回 人権教育学級

『「識字運動に学ぶ」～識字は生きる力なんよ～』を演題に、阿南市立見能林小学校長である稲村健一さんの講演を行います。

どなたでも受講できます。是非ご来場ください。

【日時】 9月9日（月） 午後2時～午後4時

【場所】 市保健センター2階（多目的室）

※当日、要約筆記を準備しています。

※授乳・育児などにご利用いただける部屋も用意しております。

詳しくは、市人権推進課（TEL 32・3814 / FAX 33・3525）まで。